大坂城
徳川家康は
二人いた

サンケイ新聞社

徳川家康は二人いた

八切止夫（やぎりとめお）

昭和45年10月10日1刷

定価500円

発行者　竹内　格

印刷　株式会社堀内印刷所

製本　田中製本印刷株式会社

発行所　サンケイ新聞社出版局
東京・中央区江戸橋一の七(103)
大阪・北区梅田町二七(530)

〈検印省略〉

乱丁・落丁はおとりかえいたします

© 八切止夫 1970 Printed in Japan

0093-070583-2756

目次

革命児誕生……9
売られてゆく……15
何故ならば……21
鐘打七変化……27
ささら者……34
殴られ蹴られ……40

武者奉公……46
尾張の信長……52
信秀死す……63
平手政秀……80
投げ瓢箪……90
道三入道……101
牛一と源内……109
願人坊主……117
延暦の昔……123
白旗党余類……129

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

瀬名姫……137
兎のあつもの……142
大久保党……148
美人谷……154
竹千代誘拐……162
遠州白須賀党……169
美濃反乱……175
那古野騒動……179
末森城の女……187
信長出陣……193

飯尾一門……200
奇蝶は泣く……205
山口父子誅殺……210
その前後……218
桶狭間へ……226
今川義元……234
深慮遠謀……241
浜松曳馬城……248
犬居攻め……253
山家三方衆……260

三河三宅一族……265
一夜に四城……271
松平元康と対決……278
岡崎兵の包囲……282
家康と元康の決戦……291
森山崩れ……299
清州城盟約……308
贋もの本もの……315

裝幀・生頼範義

徳川家康は二人いた

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

革命児誕生

世をあげて、これ乱世である。

府中の町並みでは、美しい唐衣を頭からかぶり供をつれ歩く栄華な女たちも見られるし、たらふく飯を食い、酒の香さえぷんぷんさせて、大路をわが物顔をして歩く狩衣姿の武者もいて、そこだけ眺めれば、まこと天下泰平のおもむきであるが、一歩でも辻をおれて裏町へ入ると、そこは地獄さながらの餓鬼道である。いくら田畑を耕しても取入れの作物のあらかたをまきあげられて、いまは逃散してこの町へと逃げこんできている者。

あいつぐ合戦で、そのものいりに税をかけられ年ごとの物価高で喘ぐ庶民の群れが、吹きだまりの落葉のようにひしめいていた。

この駿河、遠江、三河の三国は、今川氏親が大永六年（一五二六年）に、「仮名目録」三十三条という法令を出したが、今川義元が家督相続して十七年目の天文二十二年二月二十六日には、追加二十一条までを制定した。

法令というのは、いつの時代でも人民を守るために出されるものなど一つもあるはずはなく、そのあべこべのものである。「富国強兵」のために、今川義元は、点役（天役、転役）とよぶ均等割税を人頭税のごとくかけ、棟別銭という固定資産税をもうけ、その他に、四分一、押立という人夫役。戦に出す軍夫の割当。つまり血税もかけ、徴兵猶予を願い出る者からは命代をとりあげた。この他、桑役、茶役、船役、湊役など数えきれないくらいに、なんでも片っ端から税をかけた。といって、「酷税で

ある」と、百姓が一揆を起こせるようになったのは、徳川時代にはいってからのことで、戦国時代にそんなことをしたら村中が皆殺しにされてしまう。だから、てんでんばらばらに逃げてきた連中が、この駿府の宮ガ崎から八幡小路あたりに蓆小屋をつくったり、蒲の穂や萱草で屋根をふいた堀立て小屋を造り、「世直しをせえへんと生きてゆけすか」泥みたいに疲れきったまま、その日その日の暮らしにみな喘ぎきっていた。

さて、この当時駿府の牢は横田町にあったが、現今のように刑務所内で印刷をやらせたり家具を作らせて収益をあげられる時代ではなかった。だから、早く叩き殺して解体した方が、それだけ食い扶持が助かったし、もうかった。

だから、どんどん捕えたものは早く殺したが、またこれにはわけがあった。

なにしろ今と違って薬がなかったこの時代は、唐人や韓人が関西から駿府へも入りこんできていて、「生血は卒中や中風の特効剤」「生肉は天刑病や労咳（肺結核）の薬」「生き肝は腹の病用」「生きた脳味噌をまるめた六神丸は気つけの妙薬」と売りひろめ、原料のはいりやすい処刑場の側で小さな薬品製造業をやっていた。

――今でも漢方薬を「生薬（きぐすり）」というのはこの頃の名残りで、黒焼として売出したのは生肉では遠くまで売りにゆけぬから、営業上これをかえ、明治以降は取締りがうるさいから、猿の黒焼、いもりの黒焼となった。しかしまだ明治中期までは、レプラには生きた人間の尻の肉が特効薬であると、刀をもって斬ってまわった野口男三郎というのがいて、世間でも業病には生肉と思っていたから、その点をおおいに同情され、「ああ世は夢か幻か……」といった演歌が流行して、当時の女性を失神させる

くらいに、おおいにみなを泣かせたものである。

さて横田町の牢から狐ガ崎の河原にある斬首場へ、囚人をつれて行っては斬首し、「落した頭ごと、こみでいくら」と唐人に払下げをするのだが、そう一日に何人もあるものではない。だがそれでは製薬工場の唐人が原料難で困る。そこで今日の血液銀行みたいに生きているのを引っ張ってきて、脳味噌をとったり、生の肉をはぐというような事になるが、いくら唐人に、やれやれといわれても、そう通行人を物陰にかくれて、ぶん殴って連れてこられるものではない。

だから、この辺りの女は頭の毛を布に包んで比丘尼というのになり、合戦の旅にも従軍して、味方のとってくる首を水洗いしたり奇麗にして首実験にさしだす仕事をする。そして終わると手間賃として、その生首を貰ってきて、これを唐人に売ってその銭で生計をたてていた。

しかし合戦にあけくれあって月に何個と、決って生首の定期収入があれば、それで暮し向きも安定するが、なにも今川義元は比丘尼らのために戦いをするのではないから暮し向きはそうよくならない。だから比丘尼というのは年末や年始には竹の割ったのをカチャカチャ鳴らして、

「さっても、めでたい節季そうろ」などといって銭を貰って歩き、あとは山の中の同族のささら者が作って卸しにくる竹ごし笊、蓑や味噌こし、お茶の茶筅、茶くみなどを売り歩いて過ごすのだが、なにしろ後に京へ上って天下の将軍となろうとする野心家の今川義元の時代だから、酷税すぎて民家は暮し向きに困っているから、あまり貰いもよくないし、彼女らの専売品の竹細工も値よくは売れない。

そこで比丘尼の源応尼は、その娘の於大に対して、「こりゃ、働き者の男をみつけ嫁になるが、女にとっては一番ええ仕事ロじゃ」と教えた。

しかし若い女に男をみる目などあろうはずもない。於大が選んだのは、やさしそうで親切そうにみ

える江田の松本坊という願人だった。

これは「坊」とはつけるが、一遍上人が開いた時宗の遊行衆のような阿弥陀派ではない。つまり西方極楽浄土を説く普通の仏ではなく、反対に東光さまを説くお薬師さま畑で、信心よりも祈禱のお拝み屋である。

――古い昔にさかのぼると、仏教や回教をもって船に乗って渡ってきた文化民族に追われて、山の中へとじこめられた原住民族である。白旗をたててかつては鎌倉に幕府をもうけた事もあるが、北条氏にまんまと権力を奪われてからは、その一族の梶原や佐々木も次々と滅されて諸国に離散した。のち後醍醐帝の御代、おおみことのりにつつしみ蹶起こしたものの、またやぶれて新田義貞の子孫が上州に隠れ住み、これが足利氏をはばかって、江田、徳川、世良田の三流になったというけれど、足利時代には、そんな名など呼ばれずに、「白旗党余類」として扱われ、やがて応仁の乱の人手不足で山から狩り出されはしたものの、「悪党」と呼ばれ「足軽」という前線用の消耗品にされた。しかし生きのびた者は戦場で槍や鎧を自力で略奪して、これがいわゆる、「戦国武者」になった。

しかし足利将軍家の血脈である今川の領内では、こうした白旗党の余類にはそうした立身の機会もなく、女は比丘尼、男は願人か、ささら者としか扱われていなかったのである。

天文十一年壬寅十一月二十六日。

於大は松本坊との間に男の子を生んだ。ところが、

「せっかく子ができたが、なんせこの駿府の今川さま御領内では、わしらはとんと芽がでぬ。少し他所へ行って目鼻をつけ、それからお前ら母子を呼ぼうかい」

そう言い残すなり松本坊は蒸発してしまった。於大は子供を育てつつ待ったが、なかなか戻ってこ

ない。そこで源応尼は、

「おみゃあは男にうまいこと言われて、その気になって、子を生まされて、はいそれまでよで逃げられてしまってどうするね」

しきりに愚痴をこぼしたが、もはや出てきてしまった子供を、もとのところへ戻すこともできない。しかし子を抱えては食ってゆけない。そこで於大は、子供を残して、有度郡石田村の富士見馬場の久松士佐という家へ、後妻にと貰われていった。すぐ、のち三郎太康元と名乗るようになる異兄弟がそちらでできてしまったので、前の子供は祖母の許で育った。

「ばあちゃん子は三文安」という言葉もあるが、父に蒸発され母に置き去りにされた子供は、ひいひい泣いてばかりいたらしい。

しかも祖母の源応尼は戦いがあれば首を拾いにゆかねばならないし、またお貰いしなければ食ってゆけない。そこで他行するときには預けてゆく所もないから、処刑場の側のお堂へおいていった。

もともとここのお堂というのは、なにも処刑人の回向を葬ってやるといった殊勝な目的のためにあるのではなく、唐人の生薬屋に原料をいれるため、斬首される人間が出ない時に、その埋め合せに、部落の人間が他所からさらってきて生きたままこれを処分するのに、人目につくのを恐れて作った小屋だから、子供は幼い時から人殺しの場面に何度も立ち会って見馴れてしまったらしい。

後年この子供が成人したのち、冷酷無比とか残忍きわまりなしといった評価もされるが、「三つ子の魂百まで」というから、これまた仕方もないことであろう。さて、この堂は、戦前までは八幡小路に現存していた円光寺の末寺というほどでもないが、まあ管轄下にあった。後世は浄土宗になったから月見山円光寺の名であるが、『駿河誌』の掲載寺記によると、初めは東光系のもので、

「東照山」となっている。この例証は『咬雑物語』に、

「神相大君ご幼年のみぎり一寺に学びたまい、みずから東照院と命名され、のち江戸にその僧を呼び、これに一寺を造り与えたまう。これすなわち栄広山東照院興源寺なり」

とあるのでも判るが、いくらなんぼなんでも、三つや四つの子供が東照院と命名したというのは大げさすぎる。初めからその名であったものらしい。

さて円光寺の智短和尚は、狐塚の河原の堂で拐(かどわか)してきた人間や部落の中で病気になった者を、よってたかって押さえつけ、生きながら血を搾(と)って竹筒に入れ、「とりたてのほやほや温かいよお」と売りにでかけたり、頭の骨をまさかりで叩き割って、味噌を芋の葉に包んで唐人の許へ売りにゆくのを見かね、いつもここまで見回りによっては口を酸っぱくして、「いい加減にせんかい」何度もたしなめはしたものの、なにしろ幽鬼のような連中で、腹をさいて肝をとったあとは、餓鬼のように塩をつけ生のままの肉を奪いあうようにして齧っているような有様だからして、

(これも世の中が悪いのじゃが……)と物価高で普通では食してゆけず、みな浅ましい畜生道に落ち入っているのを嘆き悲しんでいたが、なんといっても気になるのは、いつも血みどろの堂の中にちょこなんと坐っているちびの子供である。

聞けば父に去られ母に置いてゆかれて孤児だという。そこで和尚は、「こういう所へ幼児を置いておくのは、教育上よろしくない」といった配慮よりも、

(小さくとも頭には味噌があるし、腹中には肝も入っていよう……だからそのうちに獲物のない時は、切羽詰った飢えたやつらに叩き殺されて食われてしまうやも知れん)

不憫になって東照山円光寺の方へつれ戻ってきた。もちろん小僧代わりに引取ってきたのだから、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com